

菅原和孝編

『身体化の人類学』 ——認知・記憶・言語・他者』

世界思想社、2013 年、4,800 円＋税、x＋445 頁

佐川 徹

身体化とは、「人間の生が、他の動物たちのそれとまったく同じように、身体によってこの世界に根をおろしているという事態を端的に表すことば」(p.i) である。日々の営みをふり返ってみればごく当たり前に思えるこの素朴な事態を、なぜ改めて学的探究の主題に置く必要があるのだろうか。本書でくりかえし指摘されているように、それは従来の学的探究の多くが、身体を心が収まった単なる容器として扱うことで、人びとの認識と生活から身体を疎外してきたからである。世界の知覚はつねに表象を媒介として間接的になされるという前提に依拠して、「文化」を表象の集合体に還元してきた人類学もその点は同様であった。

もっとも、本書の狙いは抽象的な思考の操作により議論の中心を心的表象から身体実践へ置きかえることではない。多くの論考で目指されているのは、フィールドワークでの直接経験から培われた問題意識と、そこで得られた個別事例の分析をとおして、心と身体を二元論的に捉える認識枠組みを具体性の次元から乗り越えることである。各章で取り扱われる内容は多彩であり、従来から身体に焦点を当てた議論がなされてきた伝統芸能や憑依にくわえて、身体との関連がにわかには想像しがたい現象、たとえば抽象的思考の結晶と考えられている数学や内的欲動の表現と見なされがちな夢が主題として登場する。執筆者の専門領域は人類学を中心としながらも、隣接領域といえる民族音楽学や言語学から、心理学、哲学、倫理学、数学にまでおよぶ。身体化という領域が包含する広大な問題系を示すに十分な陣容である。「身体化を新しい世界認識の軸に据えようとする世界で初めての試み」(p.ii) という編者の自負が記された「端緒の問い」に、以下の 17 本の論考が続く。

序章 「身体化の人類学へ向けて」(菅原和孝)

第 I 部 「認知と表象の身体化」

第 1 章 「数学における身体性」(木村大治・森田真生・亀井伸孝)

第 2 章 「心は身体的にしか語れない——心、命、魂は体のどこにあるのか」
(内堀基光)

- 第3章 「移動する身体・生成する場所——インドの移動民が夢見るところ」
(岩谷彩子)
- 第4章 「身体化された心は人類学を変えるか？」(鈴木貴之)
- 第II部 「記憶と環境の身体化」**
- 第5章 「交合する身体——心的表象なき記憶とことばのメカニズム」(大村敬一)
- 第6章 「牧畜民チャムスにおける誕生と死—身体として生きる契機」(河合香吏)
- 第7章 「自然と文化を統合する神事芸能の身体」(長澤壮平)
- 第8章 「既知から既在へ——フラッシュバルブ・メモリーへの生態学的アプローチ」
(高木光太郎)
- 第III部 「言語と意味の身体化」**
- 第9章 「過去の出来事への身体の投入——グイの身ぶり論序説」(菅原和孝)
- 第10章 「声の汚染——フローレスにおける身体と心と言葉」(青木恵理子)
- 第11章 「日本の古典音楽・芸能における身体への集中——型の具体性」(藤田隆則)
- 第12章 「身体化された文法・言語の姿を探る」(定延利之)
- 第IV部 「他者と社会の身体化」**
- 第13章 「身体化された心からテリトリー化された心へ
——イタリアにおける精神医療の経験をめぐって」(松嶋健)
- 第14章 「パースペクティヴの戯れ——憑依、ミメシス、身体」(石井美保)
- 第15章 「暴動を予防する身体——ナイロビにおける二〇〇七—二〇〇八選挙後暴力
の事例から」(松田素二)
- 第16章 「身体なきバーチャルリアリティは『悪』か」(水谷雅彦)

各章の内容をまとめよう。序章で編者の菅原は、「身体化の人類学」が取り組むべき課題を、「文化が作動する動態を身体化された実践に注目して分析すること」で、「生のもっとも根源的な基盤」(p.3)を照らすことだと宣言する。その分析の出発点となるのが、人間を「世界—内—存在」、つまり身体の直接経験に根ざして世界を知覚し、思考をくみため、同時にその世界を造りあげる存在として捉える立場である。身体化理論の系譜は認知科学、心の哲学、社会学、人類学においてたどることができるが、その原点はメルロ＝ポンティの知覚論である。

菅原は、身体化の人類学が自然主義との間に「ねじれた関係」を持たざるを得ないこと、あるいは持ちつづける必要があることに注意を促す。人類学は還元論的な自然主義に批判的立場をとる一方で、フィールド調査の成果の「正しさ」を自然主義的な説明により「証明」する誘惑にさらされている。この誘惑から逃れるために一概に自然主義を斥けるべきではないと菅原は指摘する。メルロ＝ポンティの「動機づけ」をめぐる思考を糧としながら、偶然的な所与としての身体を人間が必然として引き受けるその微細な動態論理を把握することで、自然主義との間に緊張を保った相互参照関係を築く可能性が開かれるからである。

第1章の木村・森田・亀井論文は、数学をめぐる営みの理解に身体性概念が不可欠なこ

とを論じる。木村らは、数学を専攻する大学（院）生が会話時に用いる表現や身体動作の分析から、数学的思考が身体や環境との相互作用により展開するさまを明らかにするが、構築主義的結論へ議論を帰着させるのではない。肉体としての身体は、実在する豊饒な数学的世界を「受け止める」存在であり、その世界でいまだ発見されざる真理を探索しているのは肉体を離れた身体＝超身体であるとの主張が本章の眼目である。

第2章の内堀論文は、心身二元論を乗り越えるために提出された「身体化された心」という表現にも付きまとう「心」中心主義を指摘し、日本語の「はら」やイバン語の「肝臓」をめぐる言語表現を検討することで、民俗的想像力においては身体の自明性を出発点として、身体へいかに心が与えられるのかという問いの立て方が支配的であったことを示す。そのうえで内堀は、心と身体の一統された場へと行き着く「身体化された心」をめぐる議論は、近代西洋という長い迂回を経たうえでの、民俗的想像力と同じ場への反省的回帰なのだと言く。

第3章の岩谷論文は、インドで移動生活を続けるヴァギリが夢を想起し語りあう場面に焦点を定め、その場で人びとが自己の身体を社会空間のなかに位置づけるとともに、コミュニティの境界を生活の変容に応じて更新していく様子、つまり夢の身体性と社会性を描く。夢はひとりで見るだけのものではなく、語ることをとおして変化する環境を仲間と共有し、外部世界との関係における自分たちの位置取りを調整する契機を提供する。

第4章の鈴木論文は、「身体化の人類学」が表象主義を真の意味で批判するためには、非熟慮的な行動の規則性を発見することに研究対象を限定するのではなく、行動を生むメカニズムの因果的な説明と、そこでの身体の役割の解明を目指すべきだと主張する。鈴木はそのメカニズムが「意識的な心と身体の間中に存在するように思われる」(p.142)と指摘するが、その検討を進める際に表象主義批判は「非本質的であり、誤りでさえありうる」(p.146)とも述べる。

第5章の大村論文は、記憶を脳に貯蔵された表象として捉える立場を批判した先駆者、大森荘蔵の提起した「立ち現われ」のメカニズムを、イヌイトの古老へのインタビュー場面を素材に解きあかす。50年前の狼の経験を語る古老にとり、過去の環境に対する身体図式の連鎖を再現すれば当時の光景が「立ち現われ」、聞き手は古老の発話に喚起されて自己の身体図式の流れを呼び起こすことで、その光景が面前に現れる。ふたつの光景は同一ではないが、大森―大村によれば、会話とは相手との身体図式が一致する可能性への希望に駆動されて展開する「祈り」なのだという。

第6章の河合論文は、ケニアのチャムスが誕生と死を迎えるありようを描写する。チャムスは誕生と死のどちらの機会にも盛大な儀礼はおこなわない。死後の身体にはほとんど考慮を払わず、かつては木の下に放置し、埋葬する現在でもその場所はすぐに忘れてしまう。河合はチャムスの死に対するこの乾いた態度を自身が共有できていないことを告白しながら、そこに「壊れ物としての身体をありのままに肯定する人間のありうべきひとつの姿」(p.204)を見いだす。

第7章の長澤論文は、岩手県大迫町で継承されてきた岳神楽とその舞手の身体が自然と文化の結節点であることを示す。早池峰大権現^{はやちね}は地域に鎮座する早池峰山の化身として住

民の信仰対象となってきた。権現舞による祈祷の際には、演者は権現の体に入りこむことで権現＝早池峰山を身体に内在化させ、信者は権現と身体的な相互行為を交わすことで清めを受ける。権現舞の舞台は、早池峰山と住民との日常的な絡みあいが、神楽に媒介されて人びとの身体に体现される機会としてある。

第8章の高木論文と第9章の菅原論文は、大村論文とともに記憶を心的表象から捉える立場を批判し、身体と環境が記憶のメカニズムに果たす本源的な役割を摘出する。高木論文は、重大な出来事を知った際の状況を鮮明に記憶する、しかしその内容はしばしば不正確であるFBM(Flashbulb Memory)現象を基点に論を展開する。高木によれば、記憶とは流動そのものである。記憶が流れるその向きを内在的に経路づけるのは、社会文化的な合理化の力とともに、主体が出来事の渦中において取り、想起時まで持続してきた身体の姿勢である。「想起可能性の束としての身体」(p.247)こそが記憶の「本体」だといえる。

菅原論文は、ボツワナのグイによる生活史の語りを題材に、手ぶりの形態や手ぶりと言話の連動の特徴に論点を絞って議論を進める。手ぶりはコード化された記号ではないが広義の記号的な意味作用を有しており、とくにある程度パターン化し、つよい喚起力を有するイディオムがある。とりわけ印象的な事例は、手ぶりにより現前に虚環境を立ち現せながら、そこを共同探索するグイの鮮やかな同調実践である。菅原は身体が環境との関わりにより言語的思考の手前で掴みとっている意味世界の究明こそが、人類学が探究すべき課題であると記す。

第10章の青木論文は、ことばのテキスト化により分析の対象外とされてしまう声を言話と身体との結び目として位置づけ、その実在性に光をあてる。青木は、一回ごとの言話で示される「声の身ぶり」とその反復から生じる「声の身構え」という概念を導入し、インドネシア・フローレス島の二つの社会における声の現象に接近する。両社会で用いられる言語は同一言語の方言といえるほどに記号性としては似通っているが、声の身ぶりと身構えについては固有の内容を有しており、社会関係を形成し儀礼を執行する場面において、他者との異なる共在のあり方を方向づけている。

第11章の藤田論文では、著者が参与観察した能の練習現場の風景から古典音楽・芸能における独自の学習習慣が抽出される。レッスンの過程では、弟子は師匠の忠実な模倣に励むことを強制され、パターンの応用は禁止される。また他のパートに反応することは抑制され、むしろ無関心を義務付けられる。藤田はこの模倣と無関心の背景に、型を「具体的＝体を具えている」ものと見立てる、古典芸能・音楽における型への理解があると論じる。

第12章の定延論文は、現代日本語の文法や言語がいかなる意味で身体化されているのかを問う。定延は言語により得られる情報を共有可能性の高い知識と低い体験に分類して、体験を語る文法は話者の「生」や「会話」にもとづいた「身体化された文法」であると特徴づける。また特定の役割語と結びついた「キャラクタの文法」の身体化をめぐる論述もすすめ、体験を語る文法が連辞的關係を扱うのに対して、キャラクタの文法は範列的關係を扱う点で、両者が文の構成において相補的なものであることを指摘する。

第13章の松嶋論文の舞台は、精神病院が1970年代から廃止され、精神保健が地域の生

活空間でおこなわれるようになったイタリアである。松嶋によれば、精神医療の語義はギリシア語に遡ると「プシューケーに対する配慮」と翻訳できる。プシューケーとは、環境との相互作用のなかで「生きている」ことの原理であり原因である。病院からの退院後に周囲の人たちから配慮を受けつつ自律した生を営んだある女性の人生は、地域社会で実践されているのがデカルト的な「精神」への治療ではなく、「プシューケーに対する配慮」そのものであることを浮き彫りにする。

第14章の石井論文は、南インドの憑依をともなう神霊祭祀ブーケの内容を、憑坐かつ踊り手の役割と経験に焦点を当てて分析する。神霊の憑坐となりそのパースペクティブを身につけるためには、儀礼の場で近い他者を能動的に模倣するだけではなく、受動的かつ偶発的に神霊から恩寵として憑依される必要がある。さらに神霊としてふるまうためには、神霊と自己のパースペクティブを双方ともに心身にとどめ、その二重性の間を戯れる技芸が求められる。人は憑依をとおして「人間の外に出る」し、その外の世界からのパースペクティブをとおして人間としてのあるべきふるまいを体得するのである。

第15章の松田論文が取り上げるのは、2007年の大統領選挙後に各地で暴動が発生したケニアである。この時期にナイロビのカングミ地区では暴動が発生せず、住民はパトロール隊を結成して治安を維持した。数多の研究は、紛争の原因を「部族対立」など人びとが抱く表象主義的な世界認識に帰着させてきたが、この説明ではカングミの平穏を説明できない。松田はパトロール隊参加者の語りから、過去に暴力へ巻きこまれた身体経験から生成した世界認識が、「暴動を予防する身体」をつくりだしたのだと結論づける。

第16章の水谷論文は、バーチャルリアリティ（VR）世界での生活は、リアル（R）世界における身体をとおした外的環境との関係を欠落させているという議論や、人工機械に依拠したR世界の劣化版であるとの評価に対して、二つの世界のちがいは技術的に縮減可能なものでしかないとの知見を示す。さらに水谷は、VRを道徳的に劣ったものと見なす態度は、R世界を生きる身体への「慣れ」に依拠した保守性の表明になりかねないこと、VR世界はR世界と同様に「改良」をとおして、より「善い」世界になる可能性を含んでいることに言及して論を終える。

このように本書の事例部は、数学者の研究実践を肉体なき身体＝超身体という概念を創出して論じた木村らの論文に始まり、身体なきVR世界が開く地平を見据えた水谷論文で締めくくられる。評者は、第1章から肉体性を基軸に据えた常識的な身体性概念にゆさぶりをかけられ、終章で唯脳論こそ知覚の本質を突く理論ではないかとの印象を抱かされながら本書を閉じた。菅原は本書と関わりの深い前著〔菅原 2010〕で、自己の立場を「身体实在論」や「唯身論」と呼んでいるが、この立場に抵触しかねない内容を含んだ論考を本書の両端に配置することで、身体化をめぐる議論の一元化ではなくその活性化こそを目指すという序章におけるみずからの指摘を実現している。この点以外にも、身体化をめぐる理論と発想の「新しさ」を相対化する論考として読むことができる内堀論文や、表象主義批判の妥当性をめぐり哲学の立場からきびしい診断をくだしている鈴木論文、記憶と身体の関係性を論じた各章の立論における身体範疇のずれなど、本書には上質な論文集を読む際の醍醐味である論考間の学的緊張に満ちている。各章で濃密な議論が展開されている本

書を読みとおすことは骨の折れる作業だが、読者にはぜひ通読してこの醍醐味を味わっていただきたい。

最後に一点、本書で「フィールドワークにおける身体化」に正面から取り組んだ論考がなかったことはやや意外であった。编者自身がフィールドワークとは「現地の生活にどっぷりと浸かりこみ、調査者の身体をゆっくりと変容させることを必須の条件とする他に類のない思考の方法」(p.ii)だと指摘しているからである。この指摘は、「彼らの身体化」への理解とは、フィールドにおける調査者自身の身体の変容と相互反照的にしか進展しえない事態であることを含意している。調査対象の内的論理に接近できたという「実感」[松田 1997]が、いかなる自己の身体の変容をとおして芽生え育まれたのかを丹念に跡づけることで、身体化の人類学は、1980年代に興隆し「実験的民族誌」を残したあとに影を潜めた「フィールドワークの認識論」に、より原理的な議論の可能性を開くだろう。

<参考文献>

菅原和孝 2010 『ことばと身体——「言語の手前」の人類学』講談社。

松田素二 1997 「実践的文化相対主義考——初期アフリカニストの跳躍」『民族学研究』62-2: 205-226。